回復期リハビリテーション病棟 認定看護師資格を取得しました。

回復期リハビリテーション病棟　看護副師長　玉井　栄子

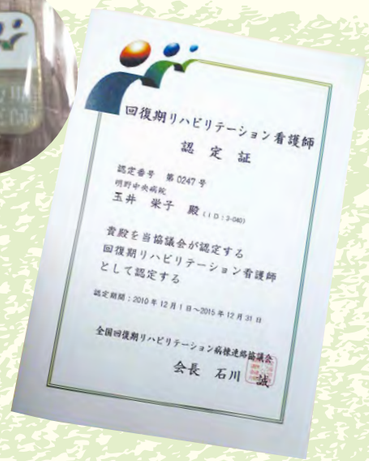
今回、全国回復期リハビリテーション病棟連絡協議会主催の、第３期回復期リハ看護師認定コースの研修に参加し、11月27日認定授与式を無事に迎えることができました。

研修の話を頂いたときは一人で東京での生活や講義に行けるのか、不安やプレッシャーを感じながらもリハ看護師の役割を明確にし、病棟に生かしていきたいという思いもあり、参加することを決めました。

講義では回復期リハの役割から身体・精神機能、疾患や看護、演習を含む人体のメカニズムなどの多彩な講義を受けました。まったく面識のない沖縄から北海道までの全国の看護師が参加、受講生の真剣な取り組む姿に緊張感を感じながらもとてもよい刺激を受けることができました。

認定書とバッジを手にしたときはほっと安心し、また同時に新たに日常生活機能の向上による寝たきり防止や在宅復帰を目指し、多職種と密な連携をとる重要性を改めて認識することができました。これからも患者さんや家族の方の笑顔を目指して、チームで質の高い看護が提供できるよう努力していきたいと思います。

当院リハビリテーションセンター風景



医療法人社団 唱和会
明野中央病院
日本医療機能評価機構　認定病院

診療科目　内科・消化器内科・リウマチ科・整形外科・形成外科
リハビリテーション科・麻酔科（森 正和）
病 床 数　75床〔2F／一般病棟45床（亜急性期病床10床含む）
3F／回復期リハビリテーション病棟30床〕

発行日　2011年1月
発　行　明野中央病院
回復期リハビリテーション病棟運営委員会
〒870-0161 大分市明野東2丁目7番33号
TEL 097-558-3211（代表）FAX097-558-3709
URL http://www.coara.or.jp/~akenohp/
E-mail akenohp@fat.coara.or.jp

◎回復期リハビリテーション病棟に関するご相談、お問い合わせは**地域医療連携室 佐藤**まで◎

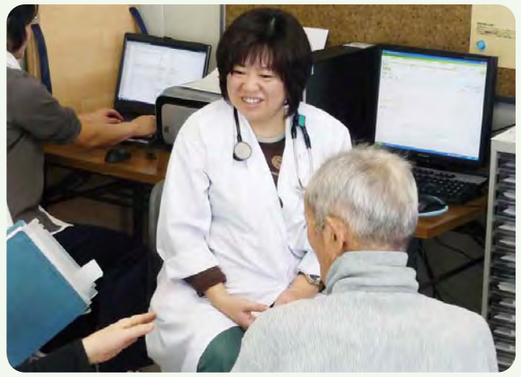
明野中央病院 回復期リハビリテーション病棟 広報誌

あけのスケッチ

AKENO vol.8 SKETCH

新年のごあいさつ

回復期リハビリテーション病棟医　神経内科　宮﨑　眞理



あけましておめでとうございます。平成も23年となりました。回復期リハビリテーション病棟の新しい一年が始まろうとしています。昨年一年を振り返ると、たくさんの患者さんが当病棟を卒業していかれました。整形外科の患者さんや内科の患者さんと、病気や障害の程度も様々、年齢もかなり異なった患者さんたちが１つの病棟でリハビリテーションを行なっています。ひとりひとりリハビリの内容や時間、方法に違いがあるため、最初は戸惑う方もあるようですが、一週間もするとすっかりなじんで治療に励んでいます。杖で、もしくは何もなくても歩けるようになった方や、残念ながら車椅子での退院になった方と様々です。できれば皆さんが当院のリハビリに満足して帰っていただけるといいなと思いつつ、スタッフ一同願っています。

当病棟はリハビリテーションのための病棟のため、他の病院とは少し違った雰囲気があります。まず、第一に患者さんが寝巻きを着ていません。朝起きるときにリハビリの一環として、服を着替えるのです。そうする事により、一日のリズムができ、自宅へ帰るために準備として、服を着替えるのにどういう所が不自由なのか、どうすれば簡単に着替えることが出来るようになるのかということも練習していきます。洗面や整容などの身づくろい、歯磨きするのにどこが難しいか、など日常生活に準じて一つ一つ確認していく作業があります。その次は、外出・外泊訓練です。なるだけ早い時期に実際にこれから生活していくことになる場所（たいていは自宅ですね）で、玄関が上がりにくくはないか、トイレにスムーズに行けるかどうか、入浴は自分ひとりで出来るかなど具体的に行なって、不自由なところに手すりや段差の解消などの住宅改修などの提案をさせていただいたりもします。

当病棟の目標は自宅への復帰であり、帰られた患者さんが出来るだけ不自由なく生活できるように本人の能力の向上と環境の整備へ向けてお手伝いさせていただけたらと思っています。今年は卯年です。ウサギのように飛び跳ねてというわけにはいきませんが、一歩一歩確実に退院、自宅復帰へ向けてスタッフ一同、患者さんとともにがんばっていこうと思います。

研究発表会報告
第48回 大分県病院学会　看護部会
～心も体も動かそう！「遊びリテーション」の取り組みについて～

回復期リハビリテーション病棟　看護師　畑　　理 美

今回の学会では、「患者さんの日常生活機能をさらに向上させるにはどうしたらよいか」をテーマに、当院で行っている「遊びリテーション」の取り組みについて発表しました。

回復期リハビリテーション病棟では、リハビリテーションは理学療法士や作業療法士だけが行うものではなく、全職種が入院生活のあらゆる場面でリハビリプログラムに参加しています。ナースサイドとしては、業務改善として「リハビリ担当ナース」を導入し、看護師が行えるリハビリプログラムを考案しました。

そのひとつが「遊びリテーション（バランス体操の考案・風船バレーの試み）」であり、楽しみながら体を動かし、離床時間の延長や心身の活性化を狙ったものでした。遊びリテーションに参加した患者さんには普段見られないようなくつろいだ笑顔が見られ、退院間近には、「今日は、まだしないの」などの積極的な言葉が聞かれるようにもなりました。面会に見えた家族の方も、「お母さんの顔が生き生きしている」「笑顔が多くなった」などのご意見も聞かれました。

患者さんが「楽しい」と感じることで、自然と心と体が動き、それが結果として日常生活機能の向上に繋がることを意識して取り組んだ活動でしたが、リハビリはしてもらうものではなく、患者さんが「やろう」とするところから始まるものだとあらためて感じることができました。

リハビリ担当ナースの導入は、スタッフ間のリハビリに対する意識を高める結果にもつながり、チーム医療について再度考えるきっかけにもなりました。今後もチームスタッフと情報を共有しながら、早期に在宅復帰ができるよう、取り組んでいきたいと思います。

ボーリングゲーム

足こぎ車いす

思わず手が出る！風船バレー

オリジナルバランス体操

集中力も使います

リハビリテーションは患者さんとの“共同作業”
～カンファレス（目標設定会議）の活用を通して～

言語聴覚士　松 本　昌 子

定期カンファレンスの様子

回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期リハ）では、開設当初から多職種による「カンファレンス（目標設定会議）」に力を入れています。

毎週行われるカンファレンスでは、病院のスタッフだけでなく、患者さんやご家族、地域のケアマネージャーさんにも参加してもらい、現状報告やリハビリの目標設定、 今後の方向性などについて話し合います。

リハビリテーションが効果を上げるためには、全員が同じ目標に向かって取り組むことが大切です。患者さんやご家族が参加されることで、早期から障害に対する理解や協力が得られやすく、また介護力や自宅環境の問題なども含めた、より具体的な治療のゴールを設定することができます。

また、定期カンファレンスとは別に、１週間に１回（入院３週目以降は２週に１回）、全患者さんに対して「ＦＩＭカンファレンス」を実施しています。 これは、日々変化する患者さんの身体状況に合わせて、“今週はこの目標を達成する為に頑張ろう”とスモールステップの課題設定をする作業です。患者さんからは、病室で一緒に目標を決めることで、「自分自身に自信が持てる」「モチベーションがあがる」等の声が聞かれています。

回復期リハ病棟は患者さんやご家族にとって、病気や怪我をした後に始まる生活のスタート地点であるといえます。数ヵ月の入院というのはわずかな期間ではありますが、ここでのリハビリが、その後の生活に大きく影響することを考えると、患者さんやご家族が不安なく退院後の生活を迎えるために、何度も話し合いを重ねることは大変重要なリハビリテーションプログラムの一つであると私たちは考えています。たとえ後遺症が重く、障害が残ってしまった場合であっても、患者さんが望む豊かで充実した生活・人生が送れるよう、新しいスタートのお手伝いができる病棟を目指していきたいと思います。

床上動作の検討

患者さんと一緒に在宅復帰の
課題を考えます